

家庭発展 特別授業「バングラデシュとの交流」

9月8日(火)、認定特定非営利活動法人「国際エンゼル協会」の加藤圭二さん、桧垣保子さん、日野田千代子さんにお越しいただき、3限は民族衣装(サリー)の着付け実習を行いました。桧垣さんによる代表生徒へのサリーの着付け師範の後、桧垣さんと日野田さんサポートのもと、好きな色のサリーを選び、ペアになって自分達で色とりどりのシルクのサリーを着付けて、記念写真撮影を行いました。4限は東村良平事務局長はじめ日本のスタッフの方が現在バングラデシュに滞在中とのことで、ズームを利用して、現地の生徒さんとの交流を行いました。本校生による日本の高校生活の紹介のあと、バングラデシュの生徒からの質問を受けたり、逆に本校生からバングラデシュの生徒へ質問したりと、交流を図りました。ベンガル語と日本語の通訳は、アジズル・バリ現地プロジェクト代表が務めてくださりました。生徒たちは、行事のこと、授業時間や頭髮・服装のルールなど、日本との違いを現地の生徒と交流することで実感をもってバングラデシュへの理解を深めることができたようです。

授業後のレポートでは、「授業前はバングラデシュについて国名と少しの情報しか知らず、自分とは遠い世界の話のように感じていたが、実際にサリーを着たり、国際エンゼル協会の方々や現地の学校の方の話を聞いたりしたことで、同じ地球上に生きる人々の具体的な営みとして捉えられるように意識が大きく変化した。今後は、日本と諸外国の違いを、ただ珍しいものとして終わらせるのではなく、その背景にある文化や教育・貧困といった社会的な課題にも関心を持ち続けたい。」「国が変われば学校生活も環境も大きく違うことを知り、様々な文化や生活の仕方を知ることが大切だと感じた。これからはニュースや外国の文化に触れるときも自分の知っていることだけで判断せず、相手の文化や背景を尊重する姿勢を大切にしたい。」などと述べており、他国の現状から自国や自分の行動について考え、他国の文化を尊重する姿勢も養われ、学びを深められた生徒が多かったです。通信状況や通訳のためのタイムラグなどで通常の講演のような進行とはいきませんでした。徐々にリラックスして交流できるようになり、最後は画面越しに手を振りあって笑顔で交流を終えました。



6mもあるサリー:桧垣さん(左)が着用されているのは日常着のサロアカミス



↑代表生徒が事前に学校生活についてまとめ、発表しました。

最後にダンスを披露してくださいました。



バングラデシュの学校の様子